

2017年2月5日(日)に社会委員会学習会を開催致しました。学習会にはノンフィクションライターの飯島裕子氏を講師としてお招きし、「現代若者の貧困と私たちにできること」と題して、講演して頂きました。

貧困はどの世代でも発生しうる社会問題であり、わが国の現代社会を象徴する言葉として「貧困」が用いられている部分もあると言えます。若者の貧困は一義的に雇用・労働問題、住居問題等に目を向けてしまいますが、飯島氏は、貧困とは社会的排除でもあり、社会や人との繋がりが切れている状態でもあると話されました。人を受け入れることが、孤立という貧困救済に結びつくのであれば、私たちにできることも少し見えてきたような思いになりました。

参加者は51名(男性12名、女性39名)でした。参加者の皆様、ありがとうございました。  
(社会委員長：J・K)



## 現代若者の貧困と 私たちにできること

ノンフィクションライター：飯島 裕子

### ■自己紹介

飯島と申します。よろしくお願ひいたします。今日は講演のタイトルを「現代若者の貧困と私たちにできること」としました。「私たちにできること」については、私の方ではちゃんとした答えを用意できていないので、皆さんと一緒に考えるスタンスでお話したいと思っています。

最初に自己紹介を簡単にします。現在はライターと大学で非常勤講師の仕事をしています。大学では社会学や雇用、貧困に関わる講座などを担当しています。

昨年受けたインタビューがつい先日雑誌に掲載されましたので、自己紹介代わりにそれ

を参考にお配りしてみました。あとで読んでいただければと思いますが、私はクリスチャンです。カトリックで洗礼を受けています。この雑誌はカトリックのサレジオ会という修道会が経営している全国のミッションスクールで配られているものです。私はあまり熱心に教会へ行けていなくて、恥ずかしい限りなのですが、そんな話も書いてあります。

私は大学生の時にフィリピンに行って、初めて「貧困」に出会いました。サレジオ会がやっている若者を中心としたボランティアグループに参加し、約1ヵ月フィリピンにある孤児院などに滞在しました。そこで本当に目に見える形での貧困に出会いました。その頃、

日本はバブルがはじけた後ではあったのですが、貧困問題は語られることのない時代でした。そんな中で、日本を一步出れば、全く違った世界があるということを知ったわけです。

その後社会人になりましたが、ちょうど就職氷河期が始まった頃でした。私自身も就職活動をしましたが、なかなかうまくいかず、数年前のバブルの時に就職した人たちとはまったく状況が違ふと思ひ始めました。大学卒業後は、非営利の組織で1年ほど働きましたが、もともと興味があった記者の仕事がしたいと1年ほどで退職。

キリスト新聞というエキュメニカルをうたう新聞社で記者になりました。プロテスタントの教会にも取材に出かけていっていたのですよ。

キリスト新聞で6年ぐらゐ勤めた後にフリーになりました。大きな志があったわけではありませんが、頼まれた仕事を受けているうちに、1人でもやっけて行けるかなあと思ひて、フリーになりました。

でも時代は出版不況真っ只中。活字を読まなくなる、あるいはインターネットが取って代わるといふ中で、新しい雑誌が創刊されて、そこにライターとしてエントリーしても、すぐに休刊という名の廃刊になってしまうようなこともいくつか経験しました。

フリーランス仲間の間でも、家族を養わなければならないと会社に就職したり、地元へ帰る人が出てきたりし始めました。

レジュメに書きましたが、フィリピンに行っていた時は「遠くで燃えていたはずの火だった貧困が、気がつけば、すぐ近くで燃えていた」といふような状況を感じるようになりました。

貧困の問題を身近に感じるようになったき

っかけの一つに、『ビッグイシュー』という雑誌との出会いもあります。

『ビッグイシュー』という雑誌をご存じの方いらっしやいますか？ 結構いらっしやいますね。ホームレスの人しか売ることができない雑誌です。1冊売ると、定価の約半額が彼らの収入になるというよふな仕組みになっていて、自立を応援する雑誌です。

私がフリーになって1年後、ちょうど『ビッグイシュー』が創刊されました。その頃からずっとライターとして仕事をしていふます。

『ビッグイシュー』を開いていただくと、最初のページに「私の分岐点」といふインタビューコーナーがあります。人生のターニングポイント（分岐点）になった出来事について話していただくものなのですが、10年以上続いているインタビューなどを担当しています。

皆さんにお回ししたのは2月1日発売号（最新号）ですけれども、ユースケ・サンタマリアさんのインタビューになっています。『ビッグイシュー』を街中で見かけたら、買っていただけると嬉しいです。

『ビッグイシュー』を通して、ホームレスの人々と身近に接する機会があったといふことも、貧困という問題を考えるきっかけになったと思ひています。



## ■『ルポ 若者ホームレス』（2011）

今までに2冊の本を書きました。教会でも販売して下さったので、お読みになった方もいらっしやると思ひます。

今日は、この2冊の本を書く時にインタビューをさせていただいた若い人たちの話を中心にしたいと思ひています。

『ルポ 若者ホームレス』（ちくま新書）は、2011年、東日本大震災の少し前の1月に出た

のですが、この本が出たいきさつを簡単にお話しします。

2008年秋にリーマン・ショックがあったことはご記憶に新しいと思いますが、リーマン・ショックを前後して『ビッグイシュー』を売りたいのですけれども」と言って来られるホームレスの方の中に、若い方の姿が多く見られるようになってきました。

ビッグイシューでは、雑誌販売だけではなく、月に何回か集まって一緒にお食事をしましょうとか、クラブ活動を一緒にやりましょうとか、そんな支援活動もしています。それで若い人たちを誘うのですが、「いらっしゃいませんか？」と声をかけても、若い人は結構「いや、いいです」という人が多かった。また『ビッグイシュー』の販売を始めても、すぐに辞めてしまう方が多くて、どう接したらよいか分からない、という悩みがビッグイシューのスタッフたちの間にあったんですね。

それだったら直接話を聞いてみようということで始まったのが、若者ホームレスインタビューでした。その話をまとめたのが『ルポ 若者ホームレス』です。いろいろなことが明らかになりました。これだけでも1～2時間お話できるのですけれど、一つあげるなら、多くの若者が仕事に関する理由で路上へ出ていることでした。

リストラ等に遭って、正規の仕事を失い、その後、不安定雇用に従事するのですが、その仕事もなくなり、アパートの家賃を維持できなくなって路上に出るという感じです。



## ■ 『ルポ 貧困女子』(2016)

昨年の秋に『ルポ 貧困女子』(岩波新書)という本を出しました。『ルポ 若者ホームレ

ス』は50人に聞き取り調査を行いました、全員が男性でした。

聞き取りの主な対象者は『ビッグイシュー』を販売している方と炊出しなどで出会った人たちです。女性のホームレスの方もいらっしゃるのですが、非常に少数です。当然のことですが、女性の方は女性と分かるだけで路上では非常に危険です。ですから目立たないようにされていたり、男性か女性か分からないようにフードを被っていたりされていて、声をかけづらかったというのが正直なところです。とは言え、全員が男性だったということもあって、「女性の貧困はあるかもしれないけれども、ホームレスの人は少ないよね」とか、「女性は風俗があるから、恵まれているよね」という疑問を投げかけられたこともありました。本当にそうだろうか？ いや、そんなことはないだろう。女性も貧困なのは違いないのですが、現状を知りたいと思いました。それで若年女性の人たちにインタビューすることにしました。そこから生まれたのが、『ルポ 貧困女子』です。

これは『ルポ 若者ホームレス』の時と比べると、そんなに対象をしぼったわけではなく、非正規職あるいは無職の女性47人(年収200万円未満)に話を伺いました。貧困への転落が見えやすい男性に比べ、女性の貧困は見えづらいつと書きました。男性の場合は、仕事が非正規、非常に不安定、派遣とかで定期的な収入が得られなくなって、借りているアパートの家賃が払えなくなり、やむなく路上に出るというパターンが多いのに対して、女性の場合は、最初から非正規の人がとても多かったです。

男性の場合は、最初は正規だったけれども、何らかの理由でリストラとかいろんなことが

あつて辞めていって、階段を落ちるように転がっていくパターンが多いのですが、女性の場合、そもそも非正規から始まっていたりします。ホームレス状態を経験した女性もいらしたのですが、家賃が払えなくなって路上に出たと言うよりは、家族関係のトラブルとか、同棲している男性との関係がこじれて、家を飛び出たという場合が大半でした。

男性の場合は貧困と雇用の悪化が若者ホームレスを生み出していると言えると思うのですが、女性の場合、そこが非常に見えづらいのです。

家族関係となると、「個人的な問題」と捉えられがちです。

こうした背景もあり、現代社会に起こっている問題と彼女たちが貧困であることとの関連性が非常に分かりづらい構造になっていて、まとめることがなかなか難しかったというのが正直なところですよ。いずれにせよ、女性の貧困は見えづらいということがよく分かりました。



### ■すべては若者の貧困から始まった!?

前置きが長くなってしまいましたが、今日はちょっと欲ばって、男女両方の若者の貧困について話すように頼まれています。

私にとって貧困問題は遠い国の話だったのですが、最近すごく身近に迫ってきているという話をしましたが、皆さんの中でも、そう感じておられる方が多いのではないかと思います。それはご自身の体験ということではなくて、例えばニュースなんかでも、子どもの貧困がニュースにならない日はないくらいです。ここ1、2年で貧困問題が国会でも争点になるくらいになってきたと思います。

それはそもそもどこから始まったかと言う

と、最初に火をつけたのは若者だったのではないかと思います。貧困問題は、決していいこととは思いませんが、ブーム的にメディアに取り上げられ、消費される場所があります。2000年代は結構若者の貧困が取り沙汰されていて、ここ数年は子どもの貧困が問題になっています。私もその片棒を担いでいるということもあると思いますが、問題を細分化する、子どもの貧困、若者の貧困、女性の貧困など、分けていくことがいいのだろうかと思最近すごく違和感を覚えています。

とにかく、最初に貧困に対する注目が集まったのは、若者でした。

時間的にみると1993年ぐらいから状況が少しずつ変わり始めます。バブルが終わり、就職氷河期に突入した頃になります。

私は大学で非常勤をやっているのですが、学生さんに就職氷河期の話をすると、生まれた時からずっと氷河期だったと言う人が、今もう大学生になっているのですよね。

時代的背景を少し話すと、1995年が阪神・淡路大震災ですね。オウム真理教の地下鉄サリン事件も1995年でした。若い学生さんは、その頃生まれたいな感じで、そうか、それぐらいもう氷河期は続いているのだなあと思います。

若者の就職がどうやらバブルの頃とは違うことになっているということが分かり始めたのが1994年ぐらいです。そこから2003年が底と言われているのですが、大卒の就職率が50%台にまで落ちていってしまったということで、まさに超氷河期と言われる時代が続いていくのです。

今でこそ若者の雇用や貧困の問題は社会問題であると認識されるようになりましたが、まだこの頃は若者が仕事を選んでいるのでは

ないか、我慢が足りないからすぐ辞めるのではないか、というのが一般的な説だったので。それを象徴する言葉として「ニート」という言葉があると思います。2004年に玄田有史著『ニートフリーターでもなく失業者でもなく』（幻冬舎）という本が出て、瞬く間に「ニート」という言葉が日本中に広まりました。ニートというのは、就職活動をしているわけでもなく、学生でもなく、家事手伝いをしているわけでもなく、無業の人たちです。「ああ、こういう感じの人たち、私の周りにもいるよ」ということで、若者バッシングの様相を呈してニートという言葉が登場してきたわけです。

2007年に初めて使われた言葉が「ネットカフェ難民」です。ニートの若者、あるいは無職の若者、それから派遣とかで働いている仕事が不安定な若者が最近増えているのではないかと、いや仕事だけではなくて、住居も不安定になっていて、ネットカフェに泊まり続けている人たちが、簡単に言ってしまうと、ホームレスだと思えるのですけれども、ネットカフェ難民が出て来たと騒がれたのが2007年頃です。この頃から、若者の個人的な、いわゆる自己責任だけではなくて、社会の問題ではないかと、ようやく理解されるようになってきたのかなあとと思います。2008年は貧困元年と言ってよいかもしれませんが、2008年の末に日比谷公園で年越し派遣村というのが開かれまして、それまで見えなかった人たちの貧困が可視化された時だったと思います。

その後、若者の雇用の困難な状況が続いていたのですが、更に2014年に「ブラック企業」という言葉が登場しました。最近「ブラックバイト」という言葉も出て来ました。ブラック企業というのは、劣悪な雇用環境で働かさ

れる、とてもじゃないけど終わらないノルマを課されたりとか、あるいは残業に次ぐ残業で、身も心もボロボロにさせられてしまう企業です。ブラック企業はいろいろな定義があるのですが、最初にこの言葉を本に書いた今野晴貴さんは、わざと若者を大量に採用してもすごいノルマを課して、そこで生き残った人だけを最後に採るといような、苛烈な労働をさせる企業をブラック企業と呼びました。

今は「うちの職場、ブラックっぽいなよね」なんて若い人が言ったりしますけれども、それぐらい社会に広まっています。このように見ると、ニートという言葉が登場した頃は、若者の雇用の問題は自己責任、えり好みしているから就職できないのだと言う人がいましたが、いろいろな世の流れの中で、若者の個人に起因する問題ではなく、社会構造上の問題なんだと認識されるに至りました。

それでも現在、若者の3人に1人は非正規雇用、若年女性（20代）では大体2人に1人が非正規であるという状況は変わってはいないというのが現状です。

日本全体を見ると、2002年は29.4%だった非正規雇用率が、2015年では37.5%になっています。昨年でしたか、非正規雇用が占める割合が4割に達したということで、過去最高です。アベノミクスとか、働き方改革と言っていますが、現実には非正規雇用者が増えています。景気が回復したと言っていますが、この現状は問題だと思います。



## ■現在日本の貧困

貧困率についても触れておきたいと思います。6ページのグラフは日本の「相対的貧困率の推移」です。上の線が日本全体の相対的

貧困率、下の線が子どもの貧困率です。子どもの貧困率は、実は以前から高かったのです。さらに近年、子どもの貧困率は高まっており、1988年は12.9%、2009年が15.7%となっていますが、確かその後、16%以上になっていると思います。

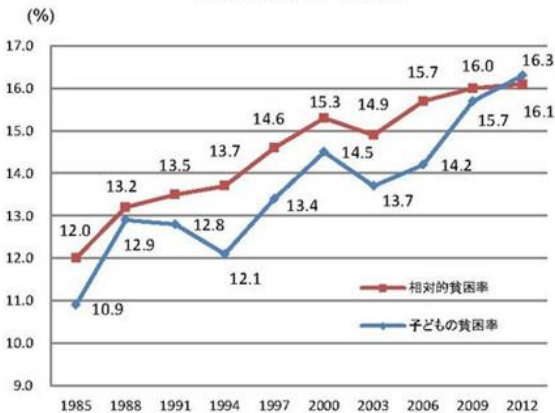
今に限らず、昔から子どもの貧困はあり続けている問題だと思うのですが、私たちの関心がなかった、あるいは見て見ぬふりをしてきたのではないかと思います。

多くの方がすでにご存知だと思いますけれど、生活保護受給者数も過去最高を更新し続けています。

さらに生活保護を受けている方を年齢で見ると、60代以降の方が半数以上です。つまりそれは年金の問題の破綻とも言えますし、単身高齢世帯が急増していることも背景にはあります。

子どもの貧困、若者の貧困というふうに区別しましたがけれども、高齢の方の貧困も非常に大きな問題です。そもそも「〇〇の貧困」などと区切っている場合ではない、深刻な状況にあるのです。

相対的貧困率の推移



出所:厚生労働省(2011,2014)「平成22年、平成25年 国民生活基礎調査 結果の概要」

出典 貧困統計ホームページ

<https://www.hinkonstat.net/>

## ■インタビューから

ここからは私がインタビューをさせていただいた方のお話をしたいと思います。

どなたの事例をお話ししようか悩みました。100件近い事例があるので、類型化してしまうと、かえって取りこぼしてしまうところがあるのかなと、いつも思いますが、今日は4人のケース(男性2人・女性2人)についてお話ししたいと思います。



### ☆Aさん(21歳・男性)

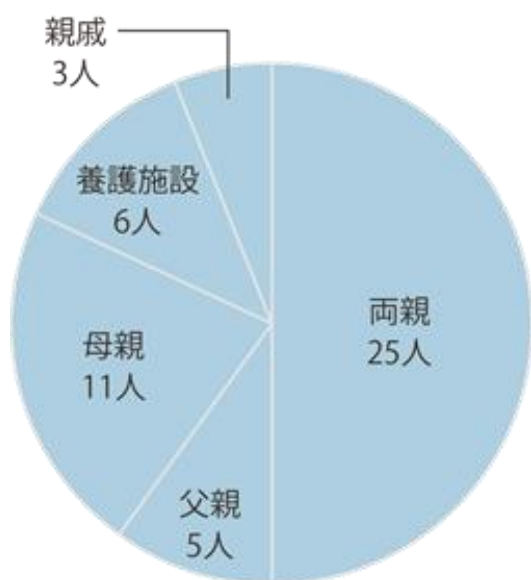
最初にAさんのお話をしたいと思います。AさんとBさんは、『ルポ 若者ホームレス』に出てこられている方です。

2人共、私が出会った時はホームレス状態でした。Aさんは母子世帯に育った21歳の男性です。お母さんがパチンコ依存とかいろいろな問題を抱えていて、Aさんの面倒を見ることができないということで、Aさんは小学5年生の時から児童養護施設に預けられて育ちました。彼からは21歳と思えないような、さまざまな経験を聞きました。お母さんはそんな状況で、少し障害もあったのだと思います。生活保護を受けていらっしゃるのですが、一度に生活保護のお金をもらってしまうと、パチンコに使ってしまうからということで、彼が役所に代理で出かけて行って、ケースワーカーさんと一緒に月のお金を割ってお母さんに渡すということを小学生の頃からしていました。

すごく人懐っこいタイプの良い人なのですが、高校を出た後、航空会社の子会社に正社員として就職しました。寮付きのところで働いていたのですが、仕事上のちょっとしたトラブルがあって、彼は責任を取らされるような形で退職することになります。児童養護施

設で育った場合、一人暮らしをするための初期資金がないので、アパートを自分で借りることが難しい場合が多いのです。そのため、寮付きの仕事とか住み込み的な仕事を探す人が多いのです。それで彼は寮付きの仕事に就いたのですが、この航空会社の子会社を退職した日から家無しの状態になってしまったわけです。ちゃんとお金を貯めておけばいいのですが、そんな知識もなかったし、トラブルがあって急に辞めなければならなくなったということもあって、仕事辞めた＝ホームレス状態になってしまいました。「それでどうしたの？」と聞いたら、自分の育った児童養護施設に行ったそうです。先生に「今日は泊まる場所あるの？」と聞かれたのだけれども、本当は寝る場所も何もなかったのですが、児童養護施設には自分の後輩と言うか、小さい子どもたちがいっぱいいるし、そこで迷惑かけるのも悪いから、「いや、大丈夫です」と言って公園で寝ていたそうです。

### 主な養育者



出典 『ルポ 若者ホームレス』(2011)

左下の円グラフは若者ホームレス 50 人に聞き取り調査を行った際に尋ねた「主な養育者」についてまとめたものです。50 人の中で、「15 歳まで主に育ててもらった人はどなたですか？」と質問したところ、児童養護施設と答えた人が 6 人いました。結構高い比率だと思います。仕事を辞めた途端にホームレス状態になってしまう人が多いです。帰る家がないということは大変なことだと思うのですが、「その間どうしていたのですか？」と聞くと、「いや、ちょっと外にいました」と。外にいました＝ホームレス状態ということなのです。路上と隣り合わせという状況が、彼らには普通にあるのだと私は驚きました。その後、Aさんはこの施設に紹介されて新聞配達店の仕事（住み込み）に就いたのですが上手くいかず、その後、日雇い派遣を経て、ホームレス状態の時に私はインタビューをしたのです。21 歳にして帰る家を持たないという状況があるのだと、その困難が見えてくると思います。



### ☆Bさん (30 歳・男性)

Bさんは、ずっと実家暮らしをしてきました。50 人の若年ホームレスの方にお話を聞いたのですけれども、家庭に恵まれないと言うか、親から虐待を受けて家を飛び出してきたとか、あるいは両親がそれぞれ再婚してしまったので自分が戻る家がないという人もいました。

一方、家族はいて、実家もあるという人もいました。

Bさんは高校を出た後、普通に正社員として大手メーカーの子会社に就職をしました。すごく気に入った職場だったのですけれども、3年でリストラの対象になってしまいました。

その後、実家で暮らしながら転職先を探すわけですが、Bさんは人と接したり話したりすることがあまり得意なタイプではなくて、なかなか仕事が見つかりません。彼としては一生懸命就職活動をしているのですが、親から見ると、家にいていつもウダウダしていて何もしない。派遣の仕事がある時は、家から出て仕事に行くのですが、仕事がない時は、自分の部屋に引きこもってゲームをしていたそうです。「フリーター/ニートのような生活」と書きましたが、親から「いい加減、正社員として就職しろ」と言われ、ケンカになって家を飛び出したそうです。

Bさんのように、親との関係でトラブルになって家を出たという人は結構いました。繰り返しになりますが、男性の場合、仕事不安定になっていって、そこから状況が悪化していくところが共通しているのかなと思いました。



### ☆Cさん (36歳・女性)

女性のケースをお話します。CさんもDさんも『ルポ 貧困女子』で紹介しているケースです。

Cさんはすごく優秀な方で理系の大学を出て、資格を持って設計事務所の総合職として就職した方です。総合職として就職したわけですが、残業に次ぐ残業で、締切りがあると徹夜も当たり前というような状況の中でメンエール病になってしまい、退職を余儀なくされます。その後、どこの会社に行っても、正社員だと残業が当たり前だったりして、ちゃんと働けるだろうかと自信をなくしてしまったので、敢えて派遣の仕事を選んでいました。有期の契約の仕事をいくつか転々としてきたのですが、35歳を過ぎた頃から、非正

規の仕事(派遣)は、上手く次の契約ができて繋がるといいのですが、なかなか次の仕事が見つからないと、結局そのまま半年とか収入がなくなってしまいます。そんな状況で、やっぱりこのまま派遣を続けることは良くないと考え、転職活動をするのですが、30代半ばを過ぎると、なかなか見つかりません。私がお会いした時は、ある派遣の仕事が切れて、仕事を探している最中でした。

彼女は仕事の悩みもあるのですけれども、一番の悩みはお母さんとの関係でした。実家でお父さん、お母さん、妹さんと暮らしているのですが、ご両親がとても厳しくて、「お金を入れろ」と言われるそうです。なかなか仕事が見つからないのに家に入れるお金を作らなければいけないということで、1日派遣のスーパーのデモンストレーターなどのバイトをして、何とかお金を作っている状況です。妹さんからは「私は仕事が大変でも家にお金を入れているのに、お姉ちゃんは甘えている」と言われたりして、すごく家に居づらい状況があります。お母さんから「36歳でいい年をして嫁にも行かず、仕事もしないで家にいてみっともない」と言われたりして、言葉の暴力に苦しんでいる状況にありました。ある時、彼女は家に鬱々としていても良くないということで、マラソンを始めました。毎日マラソンをして、ちょっと元気になったと思ったのですが、お母さんに「ご近所の人が見たらどう思うか？ みっともないから、そんなこと止めなさい」と言われてしまいました。

彼女にとって一番の解決は、実家を出ることだと思うのですが、深刻に悩んでしまって、心療内科にかかったりもしています。そのお医者さんからも「あなたの場合、家族と離



れる方が良いから、家を出た方がいいです」と言われるのだけれども出られない。なぜなら、先立つものがないからです。持って出るお金がありません。派遣を転々としていると、仕事がなくなったら、いつ家賃を払えなくなるかもしれないという不安が常にあるわけで、なかなか決断ができません。物理的にも家を出ることができないという状況にあります。Cさんに関わらず、実家を出られない、あるいは家族との人間関係に苦しんでいるケースが多いと思います。

ニートという言葉と一緒に出て来たのが「引きこもり」という言葉です。前から引きこもりという言葉はあったと思いますが、ニートという言葉とセットになって、引きこもっている若者が増えているということが、社会問題になってきました。でも、多くの場合、引きこもりとして表に出て来るのは男性のケースが多いように思います。

それは、「家族を養わなければならない若い男性が家にこもっているなんてどういうことなんだ？」という空気があったと思います。

一方、女性が家に引きこもっている場合は、見えないのです。家事手伝いと言ってしまえば、そういう部分もあるし、家族もそう思っているところもあります。本人を含めて、引きこもりではなくて「家事手伝いです」というところで体裁が整ってしまうところがあります。そんなこともあって、引きこもり人口だけを見ると、男性が圧倒的に多いです。60万人いる引きこもりの中の約3分の2が男性と言われていました。蓋を開けてみて見れば、女性ももつというはずですが、でも、そこで「家事手伝い」という言葉が隠れ蓑になって、なかなか問題化されないというところがあるのかなあとと思います。Cさんの場合は、就職し

た経験があるのですが、今回事例には挙げませんでした。中学でいじめに遭って学校に通えなくなって、社会との関係が切れたままずっときているという方も結構いらっしゃいました。そういうところも、すごく見えづらくなっているのではないかと思います。

#### ☆Dさん (29歳・女性)



Cさんのケースは家から出られない、実家暮らしに潜む困難だったと思うのですが、Dさんは一人で暮らしている方です。彼女は父子家庭で育った方ですけれども、お父さんが再婚しているので、なかなかお父さんに経済的に頼ることができない状況にあります。地方に住んでいるということもあると思いますが、新卒の時からずっと正規の仕事を探しているのですが見つからなくて、ずっと非正規の仕事を探しています。不動産事務、歯科助手、工場検品と本当に一生懸命働いているのですが、勤めていた店舗が売上不振で閉鎖になるなど、なかなかうまくいきません。不動産屋さんには売上自体が悪くなってしまい、人を切ることになったとか。いろいろなことが重なって、彼女の理由と言うよりも、外的な要因から仕事が長続きしてこなかったという状況の中で、最後に勤めた電気店では、パワハラ的な被害に遭い、うつ病になってしまいます。働けなくなってしまい、病院に行って、生活保護のことを教えてもらって、生活保護を受給することになります。

生活保護を受けて1年も経たないうちに回復してきて、今はお弁当屋さんの事務の仕事をしています。彼女は自立して頑張っているわけですけれども、正直なところ、今の事務の仕事だと、月々の給料が12~13万円とかで、生活保護を受けていた時の方が楽だったそう

です。今の仕事も非正規で、9時～5時で残業して働いていても、本当に貧困ギリギリという生活状況です。またうつ病が悪化するかわからないと考えると、生活保護を受けていた時の方が、精神的には余裕があって、「今はそういう意味では苦しいです」というお話でした。

彼女の状況から分かるのは、朝から晩まで働いても、非正規の場合は一人で暮らすだけでギリギリの賃金しか得られないということ、しかも、ちょっとしたボタンの掛け違いで失業してしまえば、生活保護受給の選択しかないという状況に追い込まれるということです。Dさんのケースを見ると、女性の場合、非正規雇用であるとか、貧困がごく当たり前のことのように元々から決められているのかなと思うぐらい困難な状況があるように思います。

## ■若者の貧困から見えること

### ①雇用の崩壊

次に若者の貧困から見えることについて考えたいと思います。言うまでもないのですがこれまで紹介した事例からも、雇用そのものが崩壊していることが分かります。

「非正規雇用率の増加」、これはもちろん、若者に限ったことではない、全世代の問題ではあるのですが、働き盛りの若者にすら仕事がないという状況にあるのです。

それから、もう一つ「劣悪な雇用環境（ブラック企業問題）」と書きました。今日は時間の関係で細かな事例の話はしませんが、本当に多くの方が精神的にボロボロになるまで追い詰められるような状況の中で働いていることが浮き彫りになってきます。

過労によりうつ病などの精神障害を抱えてしまったり、自殺に追い込まれる人もここ10

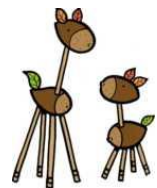
年ほどで急増しています。労災請求件数もものすごい勢いで増えており、平成12年から22年までの間で比べると、精神障害によって労災と認められた件数は8.6倍になっています。今、うつ病であるとか、精神障害に関する情報が広まったため、自分はそうかもしれないとか、自分の家族がそうだったのかもしれないということ、請求する人の数が増えていることも背景にはあるとは言え、ものすごい数で増えています。

劣悪な雇用環境は前からあったかもしれませんが、もっとそれが心を病むと言うか、そのような状況が会社で起こっていると考えられる数字だと思います。

昨年末、電通の新入社員の女性が過労自殺した事件が大きく報道されました。

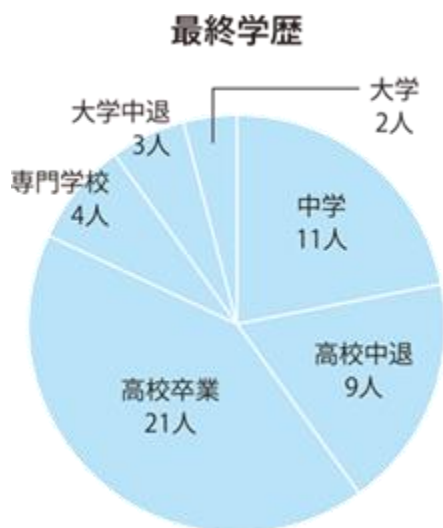
労災認定されて、その後、電通に捜査が及びましたが、彼女のような状況が広がっていると思います。今、非正規の話を中心にしてきましたけれども、彼女の場合は総合職、正社員です。

雇用の崩壊ということ言うと、非正規も大変ですが、正社員も大変なのです。非正規社員との違いを示さなければならないということもあるかもしれませんが、本当にギリギリの状態働いている人がたくさんいます。ですので、雇用の崩壊は正規・非正規に関わらず、日本全体を覆っている大きな問題であるということが見えてくると思います。



### ②貧困の連鎖

「学歴と非正規雇用」と書いたのですが、若者ホームレスの事例から考えていただくとイメージしやすいかもしれません。



出典 『ルポ 若者ホームレス』(2011)

上の円グラフは、私がインタビューした 50 人の若者ホームレスの人の最終学歴になります。高校中退を含めて、中卒の人が 50 人中 20 名ということで、かなりの数に及んでいます。

12 ページに「若年人口 (20~24 歳層) に占める正規従業員の比率 (性別)」を載せましたが、左側が女性で右側が男性で、正規雇用の人の割合です。これで見ると、学歴による差は歴然としています。全体としてそもそも女性の正規雇用の割合が低いという問題があると思いますが、男性を見ても、やはり学歴による差がものすごくあります。例えば平成 19 年、男性で見ると、大卒の人の正規雇用の比率は 74.9%であるのに対して、中卒の人は 40%で、すごく格差があります。

女性の場合、大卒だと 71.8%に対して、中卒だと 10.9%です。そういう意味では、若者の間の格差も広がっていると言えると思います。その最も大きな影響を受けているのは、男性の場合だと、学歴が低い人だと思います。一方、女性の場合、学歴による格差も色濃く

出ているのですが、女性の場合は学歴だけではなくて、学歴が高くても、仮に総合職経験があっても、事例で紹介した C さんのように、容易に困難な状況に陥ってしまうということがあると思います。

学歴というところで見ると、家庭が貧困で学びたくても学べないという問題があります。

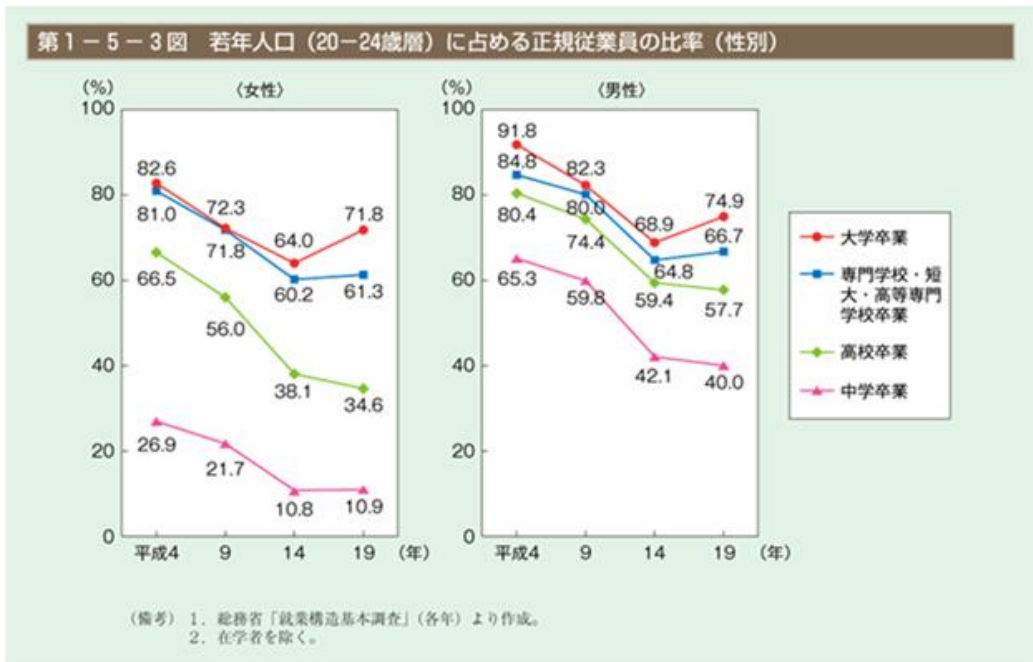
貧困の連鎖ということが言われていますが、それは単純に親が貧困だったら子どもが貧困になるということではなくて、貧困ゆえに得られなかった、学ぶ機会があったかなかったかということが、その後の人生により大きな影を落としていくのです。

奨学金という名の“借金”について、若者の話をする時に付け加えなければいけないと思います。上の学校に行かれないという話をする、「奨学金があるじゃないか」と言われる方がいると思います。日本では奨学金という名前になっていますが、実際は借金なのです。しかも多くの場合、利子付きで返さなければなりません。例えば、全く親からの援助がなく学校に行った場合、高校から年間 100 万円借りて大学まで出たら、7 年間で 700 万円の借金を背負って社会に出て行かなければなりません。昔のように、正規雇用で終身雇用が約束されていた時代であれば、返せたかもしれません。でも今は奨学金を借りて学校を出たけれども、仕事が非正規で返せないという状況があります。社会に出た段階で多額の借金を背負った人と全く借金もなくスタートできる人との差は、まさに格差社会の今の現状かなと思います。そこら辺のことも含めて考えていかなければならない問題はたくさんあると思います。

私が最初若者の貧困、特に若者ホームレス

の取材を始めた頃は、ちょうどリーマン・ショックの後だったということもあって、これは雇用の問題だと思いました。派遣切りなどが横行していた頃だったので、雇用の状況が回復していけば、若者ホームレスの数も減るだろうと思っていたのです。でも、一人ひとりの生い立ちと言うか、子ども時代を溯って見ていくと、一朝一夕では解決できないさまざまな問題を抱えていることが分かりました。雇用が回復したからと言って、彼らがすぐに

働けるかと言ったら、そんなことはありません。子ども時代から蓄積してきた、いろいろな不利が積み重なっている。貧困というだけではなく、例えば子ども時代からずっと学校でいじめられてきていたり、自信を持ってなくて、社会に出ても、ずっと被害に遭ってきて、もう働くこともできない人もいます。このように、単に雇用の問題ではなく、もっと幅広い視点をもって考えていかなければいけないと思います。



出典 平成22年版男女共同参画白書

### ③貧困と孤立

3番目にすごく感じるのが「貧困と孤立」という問題です。最近、貧困を「社会的排除」という言い方に換えることがあります。対応する理念として「社会的包摂」という言葉も聞かれます。社会的排除にはいろいろな定義があるのですが、「社会や人との繋がりが切れていく状態」とレジユメには書きました。簡単に言うと、「貧困は単純にお金がないとか、物質がない状況ではなくて、それが引き金に

はなるのだけれども、それによって社会や人との繋がりが切れていってしまう状態」です。

これまで若い人たちの貧困に関する本を書いてきたのですが、一番大きな痛みは、孤立とか孤独の問題かなと感じることがあります。『ビッグイシュー』の元販売者のある若い男性は、若いということもあり、働き口が比較的簡単に見つかったので、「よかったね、就職先見つかった。もうビッグイシューともお別れだね」と言ってお別れしたのです。ところ

が数か月後にまた戻って来ました。彼は警備員の仕事が見つかって、毎夜一人で出かけて行くのですが、現場が毎日のように変わったり、派遣で来ている人ばかりなので、ほとんど知り合いができない。家に帰っても、アパートにも周囲にも、誰も知り合いがいません。家に帰って来て、誰とも会話しないで、また夜出かけて行くという生活だったので、精神的に参ってしまって、全部放り出してビッグイシューに来たと言うんです。

ホームレス状態と言っても、路上にいる人は少なく、ネットカフェに泊まっていたりします。

本には書いたのですが、ネットカフェに泊まっている若者ホームレスの人がいて、その理由を尋ねると、寝るためというよりも、むしろインターネットを使いたいからだと言うのです。「インターネットを使って、ゲームサイトの仲間と繋がりたいからネットカフェに泊まるんだ」と言っていました。そのサイトが彼の“家族”だと言うのです。彼はそのネットの空間では自分のことを「文京区に住んでいる 32 歳で、子どもが 2 人いるサラリーマン」とか言っているそうです。自分でそういう設定を作って、それになりきって、それで遊んでいるのです。お金がなくてしばらくネットカフェに泊まれなかった場合、また戻った時に、「ちょっと仕事が忙しくて」とか「出張に行つて」と言うそうです。彼の抱えている孤独と言うか、それは食べ物とか服とか、そういうものではない、心の渇きをすごく感じる話でした。

仮に実家にいても、ずっと部屋に閉じこもっていて、家族にも厄介者扱いされて、ほとんど会話もせずに家にいる孤独な人はいっぱいいます。貧困と孤立の問題は欠かせない問

題だと感じています。

#### ④誰にとっても他人事ではない貧困

全ては若者の貧困から始まったと話してきましたが、今では貧困は誰にとっても他人事ではない問題になってきていると思います。問題意識が広まってきたということで良いこともある一方で、誰にとってもそういう状況が起こり得る時代に陥っていると思います。

現在、最も多い世帯構成は、単身世帯、すなわち一人暮らしの世帯です。

昔スタンダードだった、お父さん・お母さん・子どもというパターンは減ってきています。ひとり親が増えています。「“家族”の変容」と書きました。児童養護施設で育った A さんの話をしましたが、施設を出ると、本当に行く当てがありません。家族がいないのです。私たちは家族や親戚ぐらいいるでしょうと思うのですが、今、家族の形が多様化しています。いろいろな事情があって、21 歳で天涯孤独の身になり得るという事実があります。本当に家族って何だろうと考えさせられます。

最近、家族とは互いに助け合うものだという話を憲法 24 条の条文に入れろという話が出ています。家族は助け合うのが当たり前だと思うかもしれませんが、今、日本では単身世帯が一番多いのです。家族がいない人が増えている中で、果たしてどうなのだろうと思います。家族は大切なものではあるのですが、一方で、それ故に孤立を抱えている人たちもいるのです。

#### ■教会に何ができるのか？

偉そうなことを言える立場にはないのですが、「教会に何ができるのか？」を最後に考え



てみたいと思います。

今、孤立とか家族の話をしたのは、「教会にできることはここじゃないか」と思っているからです。

教会は多様性を受け入れるということが大事だと思っています。一方で、教会は全ての人にとって本当に居心地の良い場所なのだろうかと思うことがあります。

よく聖家族という言い方をしますけれども、今、いろいろな家族形態がありますが、やはり教会では、お父さん・お母さん・子どもの人たちが主流にあると思います。「教会は皆さんに開かれています」と言われていますが、後ろめたさを抱えている人、たとえば離婚した人とか、ひとり親家庭の人たちは教会に行きづらいのではないかと思います。困難を抱えている、何か後ろめたいと言うか、苦しんでいるけれども人に言いつらいことがあっても、なかなか行けないという場所になっているのではないかと感じています。教会はもっと多様性を受け入れる場になってもらいたいと、私は思います。

あともう一つ、「この世でたった一人でも、受け入れてくれる人がいれば、“孤立”という貧困からは救われる」と書きました。

私が好きなマザー・テレサの言葉に「この

世で最も貧しいことは、餓えて食べられないことではなく、社会から捨てられ、自分は必要がない人間であると思うことです。その孤独感こそが、最大の貧困なのです」というのがあります。彼女が1980年代、高度成長の豊かな日本に来た時に漏らした言葉です。まさに貧困の問題はこういうことなのかなあとと思います。

今日は劣悪な雇用の問題や非正規化の問題についてお話ししました。教会が仕事を作るとかは簡単にはできないと思いますが、孤立というところから、何か心の渇きを癒すとか、救うというところは、教会こそ出番と言うか、何かできることがあるのではないかと思います。それこそが教会だと思います。

家族の話をしました、「教会家族」という言い方をカトリック教会では時々します。教会を含めた、家族をどう捉えるか、どう定義するのか、どこまで家族を広げるかということだと思います。私は無限大に広げてもらいたいと思います。

イエス・キリストを中心にした“家族”を広げていくことが教会にできることではないかと思っています。これで私の話は終わります。ありがとうございました。



#### 社会委員会からのお知らせ

★飯島裕子氏の著書：『ルポ 若者ホームレス』ちくま新書 864円、『ルポ 貧困女子』岩波新書 886円。ご購入をお薦めいたします。

★社会委員会では、「安全保障を含めた憲法問題」を次年度平和聖日講演会のテーマ候補として準備を進めています。憲法問題について、ご意見がございましたら、社会委員へお知らせください。